

Miles Davis の音楽性の源泉を幼少期に探る

山 本 陽 一

1. 研究の目的

20 世紀を代表する音楽家として知られるジャズ・ミュージシャン、Miles Davis。1940 年代にニューヨークで Charlie Parker らと共にビ・バップに身を投じて以来、その名をアメリカ音楽シーンに広く知らしめ、以降幾度となく音楽様式を更新し続けた功績を持つ。1940 年代は、和声進行の拡張可能性を追求する一方、前時代の様式を取り入れ(クール・ジャズ)、1950 年代には Be Bop の作法を用いながらも曲に耳馴染みの良いアレンジを施し(ハード・バップ)、1960 年代には教会旋法を用いた即興演奏を発展させた(モード・ジャズ)。更に 1970 年代は Jimi Hendrix や James Brown といったロック、R&B、ファンクサウンドを大胆に導入した音楽を生みだした。このように、Miles の遺した最大の功績として語られることが多いその更新性だが、この性質の根源は彼の人生のどこにあるのだろうか。

本論文は Miles Davis の人と音楽の在り様を時間軸に沿って追う中で、その源泉を求めることを試みるものである。生涯に渡ってその音楽のスタイルを更新し続け、それらのスタイルがいずれも今なお一般性の高い「お手本」として後進に参照され続けているという点で Miles は他の音楽家とは一線を画している。

Miles 研究は、その生涯を概観する形であれば数は計り知れないが、特定の時期にフォーカスした研究は十分に行われていない。よって本研究の目的から、Miles の幼少年期の経験に対象時期を絞る。先行 Miles 研究論文や伝記から幼少年期にあたる時期の諸経験を洗い出し、分析し、Miles の特質との関係を見出していく。Miles の更新性と、新たなスタイルのいずれもがポピュラリティを獲得するといった特質を支える背景を明らかにし、その関係を一般化させる。

2. 構成

第 1 章 Miles Davis の生涯

第 1 節 はじめに

第 2 節 イーストセントルイスの Miles Davis

第 3 節 Miles Davis Lab.の事情

第 2 章 Miles Davis と人種問題

第 1 節 イーストセントルイスの人種構成

第 2 節 人種差別問題

第 3 章 Miles Davis の家庭環境

第 1 節 Davis 家の経済状況

第2節 Davis 家の事情

終章

3. 概要

アンビヴァレンス。これは Miles Davis の音楽性の特質と言える。1940～50 年代に見られたコードル曲における潜在的なモーダルアプローチをはじめ(和声/旋法)、Bill Evans といった白人ミュージシャンの雇用(黒人/白人)、1960 年代中期の第 2 次黄金クインテットで強調された、2 種のテンポあるいは拍子設定が並行する状況(ポリリズム)、1970 年代以降電化期のジャズ畑のミュージシャンと R&B、ファンク畑のミュージシャンとの混成(ジャズ/非ジャズ)などにそれは見られる。アンビヴァレンスは Miles の長いキャリアに通じて見られる要素なのである。本論文はその源泉を探ることを目的としたものであり、特に幼少年期に焦点を当て、2 つの点を指摘した。

第 1 章では、Miles の理解を目的に、幼少年期を概観した。歴史的、地理的、経済的背景から、Miles のアンビヴァレンスの発現を示唆し、更にはそれらの性質がいかなる形で音楽創出時に表れ、作用したかを関係の深いミュージシャンのインタビューから考察した。

Miles は多くのミュージシャンの才能を発掘した。手法は生涯変わらず、雇ったミュージシャンが既存の Miles Band 的スタイルを再現することを許さず、彼らのあるがままを表現することを要求するものであった。

アフロ・アメリカンでありながら裕福で、裕福であるがゆえにピュアネスが生じ、そのピュアネスが自己の音楽の「更新」に対する獐猛な欲望を生みだした。更に、バンドメンバーに向けての指示はアンビヴァレントかつミスティックなものであり、そういった「謎かけ」によってメンバーは自発的な解決を迫られ、それをクリアした者のみが音楽的貢献を果たすことが出来たのである。

第 2 章では、Miles のアンビヴァレンスの形成要因として、幼少期の被差別経験を仮定し、諸研究書における関係の深い者の証言などからそれらを抽出した。

イーストセントルイスは北部に位置するため元来白人をマジョリティとする町であったが、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての安価な労働力としてのアフロ・アメリカンの流入により対立が生じ、黒人学校の設置や居住区画を分けられるといった制度的差別が存在した。人種暴動も頻発し、なかでも 1917 年のものは死傷者を多数出したことで、Davis 家にも大きな衝撃を与えた。このように Miles は人種差別が決して穏やかとは言えない環境に育つこととなった。ゆえに生涯を通して人種差別への憎悪を表明し続けた Miles は、しかしながら家庭が裕福であるがゆえに一般的なアフロ・アメリカンとしての成育環境は得られず、むしろその環境は白人のそれであった。ここには二重の、アンビヴァレントな被差別的状況が見られる。つまり、Miles は当時のアメリカ社会に一般的なアフロ・アメリカンへの差別への憎悪を抱きつつも、その白人的な暮らしぶりから、完全にはアフロ・アメリカン・カルチャーにコミット出来なかったのではない。

奇形的な人種的アイデンティティは Miles のその後の人生全体に満ちるアンビヴァレンスを許容する受け皿となったであろうことは想像に難くない。

第 3 章では、アフロ・アメリカンでありながら裕福であるという Miles 一家の内情を調査した。両親による、アッパーミドルクラスとしての礼節を厳しく叩き込まれながらも、一方では、品性を欠く

暴言によって互いを罵倒しあい、時には血すら流した、両親の深刻な不和が Miles 含めた兄弟を傷つけつつ、しかし確実にその暴力性は 3 兄弟に刷り込まれた。加えて弟が同性愛者であることを知った Miles は、理解のない家族から弟を守るために男性としての振る舞いを教え込もうとしたが徒労に終わったという事実もあり、性の複雑さも家庭内に認めることが出来る。

礼節と暴力、男性性と女性性の、2つの対立項の混在。これも第 2 章における人種的アイデンティティに加え、Miles のアンビヴァレンスを強めた要素となり得るものである。

Miles 音楽は、Miles による人選及びその人物のあるがままの受容、「謎かけ」によるメンバーの才能の開花に支えられている。このことから、Miles 自身も、自らの苦悩の源とも言える幼少期のアンビヴァレントな感情を受け入れ、自身の音楽的価値を見いだすことで、その音楽性を開花させたと推測できるのではないかと。つまり、幼少期のアンビヴァレントな環境とそこでの経験は、Miles の音楽性に大きな影響を及ぼしていると言える。

附言していえば、Miles のように富裕層に属していた黒人の教育環境については、文学作品などでは扱われているものもありながら、その実態は把握されていない。教育制度の枠組みでは見えてこない、教育の実態に迫るためにも、Miles の自叙伝や関連史資料には、資料的な価値があると考えられる。本研究では、Miles のみに焦点を当てたため、他のミュージシャンや同時代の人物との比較を行うことができなかった。今後の課題としたい。

4. 主要参考文献

- ・ マイルス・デイビス、クインシー・トループ(中山康樹訳)(1990)『マイルス・デイビス自叙伝』、宝島社
- ・ ジョン・スウェッド(丸山京子訳)(2004)『マイルス・デイビスの生涯』、シンコーミュージックエンターテイメント
- ・ 菊地成孔・大谷能生(2008)『M/D マイルス・デューイ・デイヴィスⅢ世研究』、エスクァイヤマガジンジャパン

山本 陽一（筑波大学人間学群教育学類 4 年）